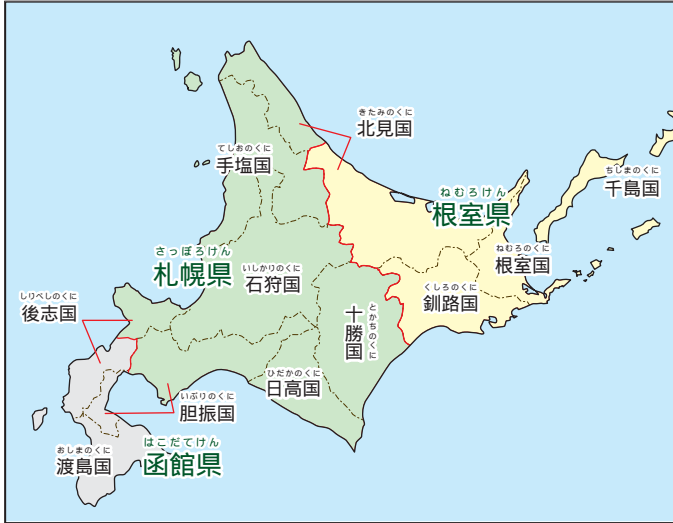


かいたくしゃ

開拓者をむかえ入れるアイヌ民族



明治2年(1869)、北海道は11国に、明治15年(1882)からは「札幌県」「函館県」「根室県」の3県に分けられた。1つの「国」が別の県に入っている。

江戸幕府がたおれ、1868年、明治新政府ができます。明治2年(1869) 十勝は静岡藩・一橋家・田安家などの支配地となり、明治4年(1871)には、北海道全体が「開拓使」の管理地となります。

明治15年(1882)には開拓使がなくなり、十勝は「札幌県」の一部になります。明治19年(1886)、北海道全体が「北海道庁」の管理下に置かれました。(p156)

こうした中で、本州からの和人が海ぞいの大津(豊頃町)などに移住し、さらに十勝の内陸に移住を始めます。

明治12年(1879)には、馬場猪之吉がオベリベリ(帯広市)の長であるモチャロクのところに仮住まいしたあと、モッケナシ(音更町)に移住しました。(p158)

開拓者を助けるアイヌの人々

明治16年(1883) 依田勉三・鈴木銃太郎・渡辺勝に率いられた「晩成社」が13戸27人とともに集団でオベリベリ(帯広市)に移住、林を切り開いて農場づくりを始めます。

当時はまだ、十勝川などの川が交通路の中心で、陸にはふみわけ道があるくらいでした。晩成社の人もほかの移住者たちも、大津との間は、十勝川を舟で行き来します。

この舟は、アイヌの人があやつる「チブ(丸木舟)」でした。

アイヌの人々は、こうした交通のほか、道案内、入地当初の家や食べ物など、開拓者たちが暮らしを始めるのに必要なものや情報を、ある時は好意で、ある時は労賃と引きかえに、あたえたのです。(チブ p128)(移住者 p158)



アイヌの人があやつるチブ(丸木舟)に乗って川をのぼる開拓者。(蓋派(池田町大森)に入植した、上徳善七が描かせたもの) (上徳善司氏蔵)

アイヌ民族と晩成社

晩成社は火事を起こすなどして、オベリベリのアイヌの人々ともめもします。しかし、その後、おわびの宴会をするなど、うまくつき合っていくことになりました。

幹部の一人、鈴木銃太郎は、アイランゲ、ウインコトレらのアイヌの人たちと仲良くなり、サケやマスをもったり、米をあげたり、農場の手伝いをしてもらったり、酒を飲んだり、深いつきあいを続け、アイヌの女性と結婚します。

サケが禁漁となったため、アイヌの人々が食べるものに困った時には、銃太郎と渡辺勝が調査し、当時大津にあった役場や札幌県に「アイヌ救済」をうったえもします。(p146)

それとともに、アイヌ民族への農業指導などもおこない、共に生きていく方法をさぐりました。(p147)



晩成社幹部の一人、渡辺勝の家があったところ(帯広市東10南5)。勝の妻カネは、同じく晩成社幹部だった鈴木銃太郎の妹だった。(市民大講堂・東小地区コミュニティ講座「帯広発祥の地めぐり」)

2 アイヌ民族と晩成社(あいぬみんぞくとばんせいしゃ): 晩成社の幹部たち、とくに鈴木銃太郎と渡辺勝・カネは、キリスト教徒でありインテリでもあった。当時の日本や世界の情勢からすると、アイヌ民族も近代化しないと民族として生きていけない、と考

えていたと思われる。しかし、開拓の進行や近代化自体がアイヌ文化をこわし、民族の危機をもたらすことまでは想像できなかった。その後、晩成社の経営はほとんどが失敗に終わってしまう。

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん